

～旧約聖書を読んで感じること～ (84) 剣の預言者 エリヤ



エリヤ像

イスラエル旅行でエリヤの足跡を訪ねて、カルメル山のカルメル会修道院に行きました。その庭にはエリヤの像がありました。エリヤは預言者でありながら、右手に剣を持って、恐ろしい形相で立ち、その足元には、イゼベルが連れてきたバアルの預言者が倒れて、踏みつけられています。エリヤの激しい生涯が想像されます。メンデルスゾーンのオラトリオ「エリヤ」で、エリヤの信仰の戦いをドラマのように表現しているのを聞いたことがあります。

エリヤはイスラエルの王アハブの宮廷長オバドヤによって王の前に連れ戻されました。アハブは「イスラエルを煩わす者よ」と責めました。それに対し、エリヤは「わたしではなく、主の戒めを捨て、バアルに従っているあなたとあなたの父の家こそ、イスラエルを煩わしている。」(列上 18:18)と言って、アハブの不信仰を咎めました。アハブはカルメル山に、バアルの預言者、イスラエルの人々を集めました。エリヤは人々に言いました。

「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」民はひと言も答えなかった。(列上 18:21) エリヤはカルメル山に「二頭の雄牛を用意する。それぞれ一頭を裂いて、薪の上に載せ、火をつけずに置く。そしてそれぞれの神に祈れば、火を持って答える神こそ、神であるはずだ」と提案します。そして 450 人のバアルの預言者たちに最初に祈るように勧めました。彼らは、朝から、真昼までバアルの名を呼び、祈り、祭壇の周りを飛び回りましたが、声もなく応える者もありませんでした。エリヤは彼らを嘲って「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」(列上 18:27)と言いました。バアルの預言者たちは彼らの習わしに従って、剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至ったとあります。昼すぎても何の兆候もありませんでした。

エリヤは壊されていた主の祭壇を丁寧に修復し、祭壇の周囲に溝を掘りました。薪の上に雄牛を置くと、4 つの瓶に水を満たし、それを雄牛と薪の上に 3 回も注ぎました。水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちました。そして祈りました。「わたしに教えてください。主よ、わたしに教えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に返したのは、あなたであることを知るでしょう。すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。(列上 18:37-39)

エリヤが祈り終わった時、祭壇の全てが、水まで焼け消えたと記されています。エリヤは水を注ぎ、燃えないようにしたはずではなかったか。もしこれが歴史的事実とすれば、「火に油を注ぐ」という言葉がありますが、エリヤは水ではなく、油を注ぎ、そして手に持つ剣を真昼の太陽に反射させ、熱を集めて、油に点火したのでしょうか。このためにも剣が必要だったのでしょうか。

戦いに勝ったエリヤはバアルの預言者を一人も逃がしてはならないと言い、キション川に連れて行って殺したと記されています。このためイゼベルにも命を狙われます。「目には目を」という報復をする時代とはいえ、自分の手によって多くの血が流されたことは、エリヤにとっても辛い経験です。エリヤはこの時から彷徨い始め、荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」(列上 19:4)と祈っています。神はエリヤを見捨てられずに、水とパン菓子を与えて、苦難の 40 日 40 夜の旅をさせ、ついに神の山ホレブに導かれました。